

主題研究

実践的コミュニケーション能力を育てる 英語科の指導に関する研究

オーセンティックなコミュニケーション活動につなげる文法指導をとおして

（第1報）

教科領域教育室 三 浦 隆

研究協力校

花巻市立湯本中学校

研究の概要

この研究は、文法指導とコミュニケーション活動を関連づけた指導をとおして、実践的コミュニケーション能力を育成する指導の在り方を明らかにしようとするものである。

第1年次の研究の結果、「英語を使う必然性」「自己関与感」「意味のやりとり中心」を要件とするオーセンティックなコミュニケーション活動を学期に1回程度設定し、その活動につなげるように、場面や働きと結びついた文法理解と、その文法知識を実際に運用する練習としての段階的なコミュニケーション活動を有機的にデザインした基本的な指導過程を作成することができた。また、コミュニケーションを支える基礎的能力を日常の授業でどう指導すればよいかも検討した。

キーワード：文法指導 オーセンティック 実践的コミュニケーション能力
意味中心 機能的コミュニケーション活動

研究の目的

今回の学習指導要領改訂において、中学校の外国語が必修となりました。国際化の進展に対応し、外国語を使って日常的な会話や簡単な情報の交換ができることが、どの生徒にも必要になっているという認識がその背景にあります。このことから、単に外国語の文法規則や語彙などについての知識をもっているというだけではなく、情報や相手の意向などを理解したり、自分の考えなどを表現したりすることができるような、実践的コミュニケーション能力の育成が強く求められています。

中学校英語科では、これまでも授業の中にコミュニケーション活動を積極的に位置づけ、指導の改善を図ってきました。しかし、生徒の英語運用能力はそれほど高まっていません。その原因の一つとして、教師が会話や表現活動のみを重視するあまり、その前提として必要な文法指導が十分に行われてきていないということが考えられます。また、これまで行われているコミュニケーション活動の多くが意味と形態の定着指導に偏り、教室の中でしか通用しない活動に終始していることも一因として考えられます。

こうした状況を改善するためには、文法指導とコミュニケーション活動を関連づけながら指導していく必要があります。特に文法指導においては、意味や形態にのみ重点を置いた指導ではなく、言語の使用場面や言語の働きの面から文法をとらえさせることが大切です。さらに、このような文法知識を生徒が意識的に活用できるように、現実の言語使用場面に即したオーセンティック(authentic)なコミュニケーション活動をとおして指導していくことが必要です。

そこで、この研究は、オーセンティックなコミュニケーション活動につなげるような文法指導の工夫改善をとおして、実践的コミュニケーション能力を育成する指導の在り方を明らかにし、中学校英語科の学習指導の改善に役立てようとするものです。

研究仮説

中学校英語科において、次のように文法指導とコミュニケーション活動を関連づけて指導を行えば、生徒に実践的コミュニケーション能力が育つであろう。

- (1) 言語の使用場面や言語の働きと結びついた、「本質」をとらえた文法理解を図る。
- (2) 定着と活用を意識した段階的なコミュニケーション活動を行う。
- (3) コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導を、継続的に行う。

実践的コミュニケーション能力を育てる英語科の指導に関する基本構想

1 これまでのコミュニケーション活動の問題点

実践的コミュニケーション能力を身に付けさせるために、教師はこれまでも、様々なコミュニケーション活動を工夫し、指導してきました。しかし、これらは教師のコントロールのもと擬似体験的に活動させていたにすぎず、既習の言語知識を実際の場面で運用できるようになるまで深化させるには不十分だったのではないかと反省すべきだと考えました。これまで行われてきた多くのコミュニケーション活動の問題点について、高島(2000)は次のようにまとめています。

単元ごとの目標構造は定まっておらず生徒にも明示されているので、たとえ不自然な場面であっても、生徒は目標構造を用いて活動をする。

ほとんどの場合、何らかの会話例が与えられていて、指示からあまり逸脱しない限りは、活動に支障をきたさない。

繰り返しの要素が多くて、あえて定められた文法構造を使わなくとも、お互いにどのような情報が欲しいのか、あるいは、どのように情報を交換するのか分かっており、極端な場合は、単語レベルで会話が成立してしまう。

現実の言語使用場面とのつながりや学習者自身の自己関与感があまりなく、教師からの指示に従って活動を行っているにすぎない。

2 オーセンティックなコミュニケーション活動とは

(1) コミュニケーション活動の本物性を高める視点

コミュニケーション活動の本物性(authenticity)を高める視点として、次の三つを考えました。

ア 英語を使う必然性

「英語の学習だから英語でやる」という段階から一歩進んで、「それ、何だろう？ おもしろそう。やってみたい。でもそのためには英語を使わなくちゃ・・・」という状況を設定することが、コミュニケーション活動の本物性を高め、生徒の学習意欲を高めることにもつながります。

イ 自己関与感

自分の好み、考え、疑問、などがそのコミュニケーションに反映され、より自分らしいかわり方ができたときに、生徒の満足感、コミュニケーションを通じてお互いを認めあうことができたという実感が生まれてくるのではないかと考えます。

ウ 意味のやりとり中心

目標とする文法構造を正しく使用して定着を図ることに重きを置くのではなく、実際にやりとりされる内容に焦点が当てられます。当然、使われる言語形式は柔軟になり、反応も定型とは限らないので、予期しなかった展開も出てきます。

(2) コミュニケーション活動の四つのステップ

このような考え方を踏まえ、教室で行われるコミュニケーション活動を、Littlewood(1981)の示した方法論的枠組みによって考えると、【表1】の四つのステップに位置づけることができます。

【表1】コミュニケーション活動の4つのステップ

コミュニケーション活動(CA)の分類	プレ・コミュニケーション活動		コミュニケーション活動	
	文型練習	疑似CA	機能的CA	社会的相互活動
説明	ある基本的な構文などを繰り返し練習し、定着させるための活動である	情報の交換など現実の世界に似せているが、ゲーム等のルールに沿った英語使用にとどまっている	ある場面を想定し、目的が限られた言語使用ではあるが、自分の現実の興味や判断に基づいて英語を使用する	教室の中だけにとどまらず、現実の世界につながっていく可能性がある
活動例	・パターン・プラクティス ・Q&A 等	・information gapを利用したゲーム等	・タスク活動 ・Show & Tell 等	・海外ビデオレター作り ・メール交換 等
英語使用の必然性	×	×		
自己関与感	×	×		
意味中心	×			

表中、右の方にいくほどオーセンティックな活動となります。左側の二つの活動は、どちらも言語習得のステップとして必要な活動ではありますが、特定の文法構造の定着練習であり、まだ本当の意味でのコミュニケーションには近づいていません。これに対し、右側の二つの活動は、上記ア～ウの視点が活かされており、より総合的な力が必要とされます。四つの活動はどれも等しく重要ですが、これまではプレ・コミュニケーション活動で終わってしまったり、右側の活動が単発的に扱われたりすることが多かったと思われます。「社会的相互活動」のようなオーセンティックなコミュニケーション活動を目標に、そこにつなげていくための活動を関連づけて指導していくことが大切です。

3 オーセンティックなコミュニケーション活動につなげる文法指導とは

では、実際に、コミュニケーションに必要な知識として生徒に文法知識を身に付けさせ、さらに運用レベルまで高めるためには、どのような指導を行えばよいのでしょうか。端的に言えば、一つは、その文法項目の持つ本質的な意味を理解させることです。コミュニケーションの目的を達成するために、特定の形態がいかなる場面でどのような意味・働きを持つのかという「本質」を、他の文法項目と比較しながら、理解させる必要があります。もう一つは、実際にその知識を活用させるような活動を設定することです。自動車の運転になぞらえれば、学科で得た運転技術に関する知識を、教習所内のコースで徹底的に反復練習し、さらに路上での実地訓練で実際の場面に応用できるような総合的な訓練を積むのです。前頁【表1】で言うなら、コース内の練習がプレ・コミュニケーション活動、路上訓練がコミュニケーション活動にあたります。このように、ある文法知識について定着と活用を意識した段階的なコミュニケーション活動を行うことによって、頭の中で理解した「本質」を「運用」に結び付けることが可能になると考えます。

(1) 「本質」をとらえた文法理解

「本質」をとらえた文法理解とは、特定の形態がいかなる場面でどのような意味・働きを持つのかを理解し、具体的な使用場面がイメージできるようにすることです。そして、そのような「本質」をとらえさせるには、いつどのような時になぜその形態を用いるのかを話者の視点に立って考えさせ、他の文法項目と対比しながら進めていくことが必要です。

このことについて、「現在進行形」を例に考えてみます。一般には、現在進行形の文法説明というと、形態「be 動詞+ -ing 形」とその意味「～している」を示して済ましてしまうことが多いです。しかし、次の二つの英文を比較するとどうでしょう。

a) I live in Hanamaki.

b) I am living in Hanamaki.

どちらの文も「私は花巻に住んでいます」と訳せますが、二つの文は厳密には同じ内容を言っているわけではありません。a)の現在形の文は、「現在の事実」を示しますが、b)の現在進行形の文は、ある動作・状態が「一時的に継続」していることを表しています。つまり、b)の文は「私は花巻に(一時的に)住んでいる」ということであり、例えば、以前別なところに住んでいた人が仕事などの関係で花巻に移り住むようになったのだが、いずれは前の場所(またはさらに別な場所)に引っ越すのかもしれない、というような具体的なイメージを伴った表現であることがわかります。

このような理解の仕方を生徒に身に付けさせるには、学習した文法項目についてその都度説明するのではなく、あるまとまった学習を終えて、生徒がいろいろな文構造を比較できるようになった時点で、整理することが望ましいと考えます。また、単なる解説による指導ではなく、適切な文脈を与えられ

たいくつかの例文の中から帰納的に「本質」を理解できるように、工夫して指導することが重要です。

(2) 定着と活用を意識した段階的なコミュニケーション活動

「本質」をとらえた文法理解で得た知識を実際の場面で運用できるようにするためには、以下のコミュニケーション活動を段階的に進める必要があります。「定着」とは、形態の習熟に注目するという一方で、「活用」とは、上で述べたような知識をよりオーセンティックな活動をとおして使用することです。

ア 段階的なコミュニケーション活動の内容

(ア) 文型練習

パターン・プラクティスなど、目標とする言語形態の習熟に専念するための機械的なドリル等を指します。

(イ) 疑似コミュニケーション活動

対話者間にインフォメーションギャップ（情報量の差）があり、それを埋めようと表面的には情報の授受を行っています。しかし、教師や生徒の関心は、そこで使用される言語形態に向けられており、どのような情報がやりとりされたかではなく、どれだけ正確に目標構文が駆使できたかが重要です。また、会話例が示されるなど教師によってコントロールされた会話であり、現実の言語使用場面とのつながりや自己関与感は薄くなります。現在教室で行われているコミュニケーション活動と称するものの多くは、これに当たると考えられます。このような活動は、「定着」の段階として必要ではあるが、「活用」を目指すには、もう一步、踏み込んだ活動が必要です。

(ウ) 機能的コミュニケーション活動

上記二つの活動が言語形態に焦点があてられているのに対し、機能的コミュニケーション活動は意味・内容の伝達に焦点があてられていて、その言語行為によって意図した「働き」がきちんとなされたかどうかに関心が向けられます。与えられた活動目標を達成することを第一義とするタスク活動などがその代表です。このような活動をとおして、生徒に英語を総合的に使用する体験を多く積ませることで、文法などの言語知識を無意識的・自動的に使えるように訓練することが必要なのです。

(エ) 社会的相互活動

教室で行われるコミュニケーション活動のうち、最もオーセンティックな活動が、この社会的相互活動です。意味・内容の伝達が最大の関心事で、指導者が特定の言語形態の使用を意識して活動をデザインすることはあっても、それを学習者が意識することはあまりありません。さらに、どういう情報がやりとりされたかという事だけでなく、その情報交換のされ方が場面に沿った適切な姿だったかどうかにも関心が払われます。話題は対話者同士の実際の興味・関心・考え・判断などによってどこまでも発展性をもつものになります。また、英語で行う必然性にも配慮され、場合によっては教室の外にも広がっていく可能性のある活動です。

イ コミュニケーションの意欲

このような総合的な活動をとおして初めて生徒は「本当に英語が使えるようになった」という実感をもつようになります。それが、英語でコミュニケーションすることへのさらなる意欲につながるし、自分の頭で考え、英語を通じて発信していこうという態度を養うことにつながると考えます。

(3) コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導

ここまで、文法とコミュニケーション活動をどのように関連づけて、生徒の英語運用能力を高めて

いくかということについて述べてきました。しかし、それだけで生徒に実践的コミュニケーション能力が育つわけではありません。コミュニケーションを支える基礎的能力が伴わなければ、絵に描いた餅に終わってしまいます。基礎的能力を育てるためには、次のア～エに示した指導を年間をとおして継続的に行うことが有効と考えます。

ア 基本的英文構造（語順を中心に）にかかわる指導

英語を難しいと感じる理由の中で、日本語との語順の違いをあげる生徒は多くいます。日本語は比較的語順が自由なのに対し、英語は語順が決まっています。語順によって意味が違ってきます。英作文でも、日本語の語順に引きずられて英語を並べてしまい、意味の通じない文になったりすることが多くあります。日本人にはなじみの薄い後置修飾や旧情報から新情報へ等といった英語の語順の特徴に慣れさせる指導が必要です。

イ 語彙指導

英単語が読めない、書けない、分からないために、英語の学習に困難を感じる生徒も多くいます。しかし、もっと重要なことは、知っているのに意外と使えない単語が多いということです。何かちょっとしたことを伝えたいのに、単語がずっと出てこない。言われてみれば、ああ、それを使えばいいの、というような簡単な単語が、実際の会話では出てこないのです。従来の語彙指導では、英単語と日本語の意味を辞書的に1対1で教えることが多かったのですが、コロケーションや単語のもつイメージについてもっと意識的に指導を行い、コミュニケーションで「使える」語彙を増やします。

ウ 音声にかかわる指導

生徒にとって、英語が聞き取れない、うまく発音できない理由は、大きく二つあります。一つは、英語の単音を正しく習得していないということです。もう一つは、語強勢や弱体化、リズム等、英語独特の音に慣れていないため、連続した音を正しく認知できないということです。生徒の認知と実際の音とのギャップを埋める聞き取り指導や、それを生かした音読指導を工夫する必要があります。

エ 方略的能力にかかわる指導

コミュニケーションを円滑に進められない理由の一つは、エラーしないことを念頭におくあまりに、一語一句を気にするためです。エラーを気にせず、英語でコミュニケーションを図ろうとする経験をもっと多く積む必要があります。

もう一つの理由は、相手の言っていることが分からなかったり、どう表現すればいいかとっさに思い浮かばなかったりした時に、聞き返したり、間をつないだりするような言葉が出てこないことです。これも、練習のなかで身に付けることが有効だと考えます。

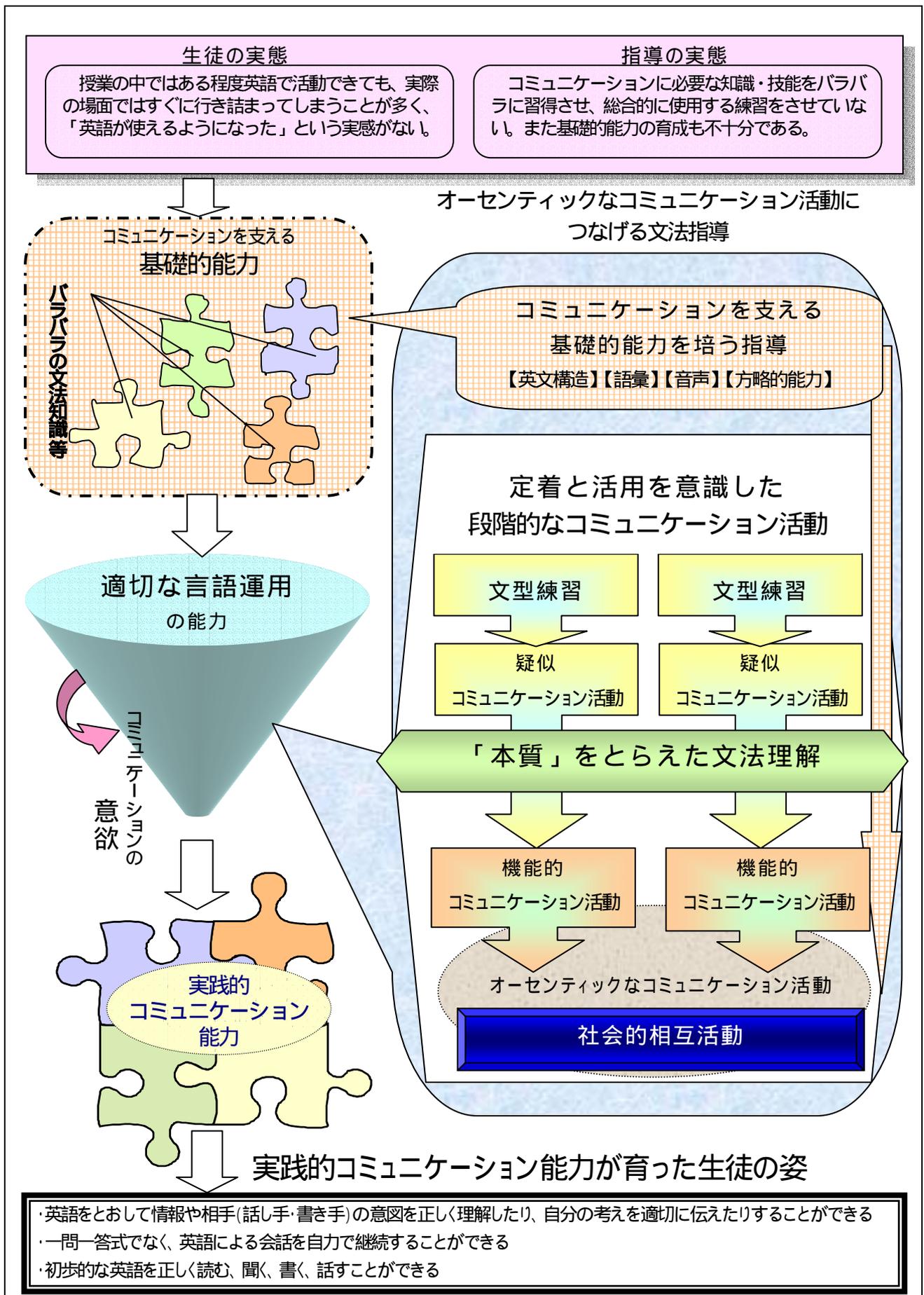
4 実践的コミュニケーション能力を育てる英語科の指導に関する基本構想図

以上のことから、実践的コミュニケーション能力を育てる英語科の指導に関する基本構想図を、次頁【図1】のように作成しました。

実践的コミュニケーション能力を育てる英語科の指導の進め方

1 実践的コミュニケーション能力を育てる英語科の基本的な指導過程

上記の基本構想をもとに、実践的コミュニケーション能力を育てる英語科の基本的な指導過程を次々頁【表2】のように作成しました。作成の視点や留意点は後に述べるとおりです。



【図1】実践的コミュニケーション能力を育てる英語科の指導に関する基本構想図

【表2】実践的コミュニケーション能力を育てる英語科の基本的な指導過程

学習過程	学習内容と手だて(太字)	留意点
目標の提示	オーセンティックなコミュニケーション活動(社会的相互活動)の概要提示	・学年のねらいに応じて具体的到達目標を設定する
単元	定着に向けた活動 A S A P 活動【方略的能力】 ブリーフ・トーキング【方略的能力】 1. 目標文法項目の導入 2. 文型練習 3. 疑似コミュニケーション活動	・A S A P 活動と、ブリーフ・トーキングは、毎時間継続して行う ・目標文法項目の導入は、自然な場面で、その表現が必要とされる文脈を与えるよう配慮する ・文型練習や疑似コミュニケーション活動は、意味と形態の定着を意識しながら、後の活動とつながるよう、語彙や内容にも配慮する
	A S A P 活動【方略的能力】 ブリーフ・トーキング【方略的能力】 4. 前時の復習(文型練習など) 5. 新出語句の導入【語彙、音声】 6. 教科書本文の内容理解【語順】 7. 音読練習【音声】 8. 学習のまとめ(疑似コミュニケーション種など)	・【付数字】は、後述「4 コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導を取り入れる際の留意点」に対応 ・前時の復習や学習のまとめでも、文型練習や疑似コミュニケーション活動を適宜行い、定着を図る
	上記の学習活動を、単元の学習内容に従って繰り返す	
	活用に向けた活動 9. 「本質」をとらえた文法理解 10. 機能的コミュニケーション活動 11. 単元のまとめ (活動のフィードバック、英作文練習【語順】、等)	・教師からの一方的な説明ではなく、適切な場面・文脈を与え、どうしてその表現が用いられるのかを話者の視点に立って考えさせる ・意味内容の伝達を中心としながらも、目標文法構造と既習の構造を比較して選択・使用させる ・うまく運用できた、できなかったところをおさえ、再度指導する
∴ 単元 n	∴ 同上	∴ 同上
オーセンティックなコミュニケーション活動	12. 社会的相互活動 13. 活動の振り返り	・複数単元終了後に実施する ・A L T を活用するなど本物性を高め、生徒が活動にのめり込めるよう工夫する ・評価情報を生徒にフィードバックし自分の学習の成果と課題を確認させる

2 オーセンティックなコミュニケーション活動を構想するための視点

まず、生徒に身に付けさせたい文法構造や表現などをふまえ、複数単元にわたる中期的な学習の目標とすべき、オーセンティックなコミュニケーション活動を以下の視点で設定します。

(1) 英語科の学年毎のねらいを具現化する内容であること

学期毎にいくつかの具体的な達成目標を設定し、その達成目標を具現化するようなコミュニケーション活動を計画します。例えばある学年の達成目標として「自分の住む地域について、10 文程度の英文で紹介できる」を設定したら、その学期に「自分の街のCM作り」という活動を仕組む、という具合です。このコミュニケーション活動の概要は、学期始めなどに生徒にも示す必要があります。

(2) 英語使用の必然性、自己関与感、意味のやりとり中心、の三点があること

英語使用の必然性が高まるよう、ALTやインターネットを積極的に活用したり、自己関与感を高めるように、身近な話題に自分の意見を盛り込めるよう指導したりします。上記の「CM作り」の例で言えば、「姉妹都市の学校に送る」とか「ALTに地域での週末の過ごし方について紹介する」といった条件を示すことで英語使用の必然性が高まり、生徒は意欲的に取り組みます。ガイドブックの丸写しでなく、自分のお気に入りの場所やこだわりを盛り込むことで、ぐっと手作り感が増します。どんな内容を紹介すれば自分のお薦めをALTに気に入ってもらえるか考えるうちに、英語の練習という意識を飛び越えて生徒は活動に夢中になっていきます。

(3) 使用させたい文法構造が現れやすい、自然な場面が用意されていること

活動でねらいとする文法構造を使うよう指示したり、生徒が意識して使うように仕向けたりしたのでは、オーセンティックなコミュニケーション活動とは言えません。しかし、そのような表現が自然に使われるような場面を設定することで、生徒が無意識にその表現を選択し、結果として学習効果が高まるように活動をデザインすることは可能です。これについては後の項で詳しく述べます。

(4) 教科書題材等の学習内容からスムーズに発展していける内容であること

オーセンティックなコミュニケーション活動が、他の学習と切り離された特設的な扱いになってしまうと、準備に時間がかかりすぎたり、練習が不足したりして、意図したような活動にまで高まらず失敗してしまいます。教科書等の授業で扱う題材や語彙をうまく利用したり、英作文練習の内容や音読練習の方法を工夫したりして、目標とするコミュニケーション活動にうまくつながっていくよう、配慮する必要があります。

(5) 評価資料として活用すること

実践的コミュニケーション能力を育成するためには、ペーパーテストや、単なる音読テストだけではなく、実際にコミュニケーションの手段として現実場面で使用する能力を測るテストも行うべきです。オーセンティックなコミュニケーション活動は、学年や学期のねらいを具現化したものなので、その活動の結果を評価資料として大いに活用すべきです。教師やALTとの対話の様子を評価したり、活動の様子をVTRに録画して評価したりします。このようにして得た評価情報を以後の活動の構想に役立てたり、生徒にフィードバックし自分の学習の成果と課題を確認する機会としたりするので。そのために、活動の構想の際に、評価規準・判断基準も同時に作成しておくことが必要です。

3 機能的コミュニケーション活動の指導のポイント

段階的なコミュニケーション活動のうち、機能的コミュニケーション活動が成功するかどうか、教室の外に広がる英語が身に付くかどうかの別れ道です。この指導のポイントについて、もう少し詳しく説明します。

(1) 二つ以上の文法構造を比較させること

タスク活動などに代表される機能的コミュニケーション活動は、メッセージに焦点をあて、口頭によるやりとりをとおして、流暢性を目指す活動がほとんどです。そのため、「コミュニケーションが成立しさえすればよい」と考えてしまい、適切な言語表現の発達につながらない危険性もあります。

このことについて、高島(2000)は、自身の提唱する「タスク活動」の条件の一つとして「二つ以上の構造の比較があること」をあげています。つまり、既習の文法項目との関連で新しい文法項目の特徴を把握させ(例えば現在完了形と現在形や過去形など)、自分が伝えたい内容に応じて形態を比較し、

使い分けさせることを条件としているのです。このように、意味内容の伝達を中心としながら、同時に文法構造を比較させ学習者に選択・使用させるという一見相対立する条件を組み込んだ活動が必要なのです。

(2) 帰納的に「本質」を理解できるように、適切な場面・文脈を与えること

上記のような使い分けができるようになるためには、活動の前に「本質」をとらえた文法理解のための指導を位置付けることが必要です。しかし、この指導は、教師の側からの一方的な説明ではいけません。既習の表現では表しきれない、新しい表現がどうしても必要であるような場面・文脈を与え、どうしてその表現が用いられるのかを話者の視点に立って考えさせることが、生徒の納得へとつながっていきます。

したがって、学習させたい文法項目の特徴を把握し、その特徴が顕著に表れる場面、既習の文法項目では十分に伝えきれない内容を表現する状況を思い浮かべる力が、教師にとってとても大切な能力となってきます。このことは、新出文法項目の導入のスキット作りや、オーセンティックなコミュニケーション活動の最終段階となる社会的相互活動の構想にも、強く関係してきます。

(3) 活動の際の生徒のやりとりが自由で、創造性が要求されるよう配慮すること

もう一つ、機能的コミュニケーション活動の指導で大切なことは、教師が必要以上にコントロールしないということです。活動のゴールや方向は示しても、そのためにどんなやりとりをすればいいか等、いちいち説明はしません。それではうまく活動が進まず生徒が立ち往生してしまうだろうと、会話のモデルを示したり、何を聞けばいいかリストにしたりしてしまうといった教師の「支援」が、結局は教室の中でしか通用しない英語を育ててしまっていたのではないのでしょうか。本当に必要なのは、その活動以前の練習の中で、生徒が自分の力で表現できるよう段階的に指導することです。

生徒が自分の頭で考え、表現を選択した方が、あらかじめ与えられた表現をなぞる活動より、自分の使える言葉として定着すると思います。また、日本語と英語を1対1の関係でとらえるのではなく、同じ内容を伝える場合に様々な表現の中から選択する機会を多く持つことで、日本語に合わせて表現を考えるのではなく、内容に合わせて表現を選択する力が身に付きます。

4 コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導を取り入れる際の留意点

オーセンティックなコミュニケーション活動を目標とした時、どのような知識・技能がその基礎として有用なのかを見極め、それらを効果的に指導していくためにはどうすればよいかということを検討する必要があります。基本構想で述べた四つの基礎的能力の指導について、どのように取り入れていけばよいか、以下の～のように考えました。

主語、動詞、目的語・補語、修飾語句という文法用語の代わりに1、2、3、4という番号を用い、その番号を付けた箱のなかに語句をあてはめて英文を作る、という英文構造・語順にかかわる指導を、教科書を用いた1時間毎の授業や単元のまとめに取り入れます。

英語の語順の特徴に慣れさせるため、英文をチャンク(意味のまとまり)で区切って読んだり、パラグラフ内の前後の文の連続性に着目し、シーム(文の書き出しの部分)から文の内容を予測しながら読んだりする指導を、教科書本文の読み取りの際に行います。

単語の提示はできるだけ句の形や例文の中で扱うなど、コロケーションを意識した指導を新出語句の練習の際に行います。

単語のもつイメージ・含意をとらえさせるために、新出語句と絵や実物を同時に提示したり、

既習の単語や類義語と比較したりします。また、関連のある語をネットワークのように組み合わせる単語練習シートを用意し、自己表現の際に活用するなど継続的に指導します。

フォニックスを利用した音声と綴り字の指導を継続的に行います。その際、日本語とは違う音などは、例えば、岩手のある地方で大根を [dægɔ] と発音するなど、身近な音と比較することにより、認知的な生きた音声指導を行うようにします。

語強勢や弱化、リズム等、英語独特の音に慣れるため、映画や音楽などの英語の一部分を聞き取る練習を行います。また、教科書本文の音読の際に、それを生かして指導を行います。

目標文の定着練習のための会話練習用のダイアログに、聞き返しや言い換え、言いよどみなど、方略的能力に関わる表現を意図的に加え、練習をとおしてそれらの表現に慣れさせる活動(本研究では「ASAP活動」とする)を、毎時間継続して行います。

身近なトピックをもとに文の正確性よりも内容のふくらみと流暢性を大事にさせる All English による会話活動(本研究では「ブリーフ・トーキング」とする)を継続して行います。少人数グループのやりとりとし、分からないことを質問したり、感想・意見を述べあったりして、会話が不自然に途切れないよう努力します。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

第1年次の研究の結果、成果としてあげられるのは次の二点です。

一点目は、コミュニケーション活動の本物性を高める視点を三つにまとめ、オーセンティックなコミュニケーション活動を構想する手がかりを示すことができたことです。また、オーセンティックなコミュニケーション活動につなげるために、従来の文法指導を見直し、文法項目の定着練習だけにとどまらない、活用までを目指した段階的なコミュニケーション活動を構想することができました。

二点目は、オーセンティックなコミュニケーション活動を目標に据えた、中期的な学習指導の構想の視点を示し、実践的コミュニケーション能力を育てる英語科の学習指導試案としてまとめることができたことです。コミュニケーションを支える基礎的能力を日常の授業の中で継続的に指導するにはどうすればよいかも、学習指導試案に盛り込むことができました。

2 今後の課題

本年度の研究をふまえ、実践をとおして、実践的コミュニケーション能力を育てる英語科の指導の在り方について究明することが第2年次の研究内容であり、今後の課題でもあります。

【引用文献・主な参考文献・参考URL】

Littlewood, W. 1981. *Communicative Language Teaching*, Cambridge University Press.

岩手大学教育学部附属中学校研究紀要第7巻第2集 「楽しく夢中になる授業」 1994年

高島英幸 編著 「実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導」
大修館書店 2000年

高橋正夫 著 「実践的コミュニケーションの指導」 大修館書店 2001年

村野井仁・千葉元信・畑中孝寛 著 「実践的英語科教育法」 成美堂 2001年

Tawashi's Room こんな英語の授業、やっています 「<http://www.iris.dti.ne.jp/~takazawa/>」